

今を，将来をよりよく生きる 子どもを目指した授業づくり

～確かな学びにつながるための評価の在り方に焦点を当てて～



平成21年2月
鹿児島大学教育学部附属特別支援学校

はじめに

校長 新名主 健一

本校では研究テーマ「今を、将来をよりよく生きる子どもを目指した授業づくり～確かな学びにつながるための評価の在り方に焦点を当てて～」(2か年計画の2年目)の下、教育実践研究を進めています。その研究仮説は「子ども一人一人の学習内容や目標設定等の方法の検討を通して指導の根拠を明確にするとともに、授業実践における子どもの学び方や変容を具体的にとらえるための評価の在り方や生かし方を検討することで、子どもの確かな学びを実現し、現在及び将来にわたりよりよく生きる子どもを育成することができる。」というものです。

各学部はそれを受けて学部研究主題を設定し、研究内容を、「指導の根拠と方向性を明確にする(研究内容1)」、「子どもの確かな学びを実現するための授業実践と評価の在り方を探る(研究内容2)」、「系統的・継続的取組のための評価と情報の生かし方を探る(研究内容3)」に設定しました。

評価の在り方に焦点を当て、研究内容1では診断的評価、研究内容2では形成的評価・総括的評価、研究内容3では総括的評価→形成的評価と、具体的な評価の工夫をしています。特別支援学校における評価の在り方を求めたところに特色があります。

ところで、私は校長職に就くまで特別支援教育について、単に言葉の上だけの理解しかしていませんでした。実際に、子どもたちと交流し、保護者と語り、先生方に教えられることによって自分の教育観が再構築されていくのを実感しました。特別支援教育を必要とする子どもたちを含め、すべての子どもたちが共生できる社会の実現を目指さなければならないことを知った自らの不明を恥じるのみです。なぜそうなったかという、これまで特別支援教育を必要とする子どもたちとの交流がなく、教育も受けてこなかったからです。

現在、国をあげて特別支援教育に取り組む体制にあります。すべての学校において適切な支援体制による教育の推進を求められています。誠に喜ばしい限りです。特別支援学校のセンター的機能向上の責務が挙げられ、また、従来の小中学校支援のみならず、幼稚園、高等学校まで支援が広がっています。そういった責務を果たし、支援ができる力というのは、やはり意図的な教育実践と協働的な研究と研究公開による研究の深まりによってはぐくまれていくものでしょう。国立大学法人評価委員会が「附属学校の機能の充実」の具体的取組例として本校の実践を取り上げている(H20,10/9)のも、そういう活動に対する評価と考えられます。

さて、研究の結果、それまでの教育に関わる自らの縛りからの開放がなされたり、新たな縛りができたりすることは大きなエネルギーを費やします。苦痛を伴うことがあるかもしれません。しかし、このことを経て教師力は確実につくものでしょう。研究公開に参加されたり、この研究冊子を読まれる先生方にもそういうことがあるならば、この研究は、たいへん意義深いものだと言えましょう。お気付きの点があれば、どうかご指導、ご助言をいただけますようお願いいたします。

最後になりましたが、この2年間、本校の研究にご指導、ご助言を賜りました鹿児島県教育委員会、鹿児島県総合教育センター、鹿児島大学教育学部の先生方、全体講演をいただく長崎勤先生(筑波大学大学院教授)に深く感謝申し上げます。

総 目 次

はじめに	—————	校 長	新名主健一	
研究基調	—————			1
学部研究	—————			21
小学部の研究	-----			21
中学部の研究	-----			51
高等部の研究	-----			81
研究のまとめ	—————			111
おわりに	—————	副校長	宮内 英光	